



Title	言語の檻と『開墾地』ーグレゴリー・ケズナジャットの作品についてー
Author(s)	ベヘナム, ジェイ
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 23-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語の檻と『開墾地』
—グレゴリー・ケズナジャットの作品について²—
ジェイ ベヘナム（人文学研究科外国学専攻）

1. はじめに

グレゴリー・ケズナジャットの作品を読むことで、多くのことを考えさせられた。筆者もケズナジャット氏と同じく非日本語母語話者であり、作品の主人公、さらには行間から垣間見える作家自身と、日本語や日本に対する思いにおいて共通する部分が少なくない。筆者は、ケズナジャット氏と同様に、比較的早い段階から日本語を学び始め、日本に留学した経験を持つ。その後、日本の大学院で学びを深め、現在は日本の大学において教育・研究に携わっている。こうした経歴を通じて、筆者もまた、外部の視点を保ちながら日本社会と日本語に向き合ってきた。また、「イラン」というキーワードによって、ケズナジャット氏と結びついている点にも触れておきたい。ケズナジャット氏は、二つの文化および言語のあいだに位置する世界を描写していることが多い。そのため、氏の作品は、単一の言語・文化の枠内で生きる読者よりも、複数の言語や文化にまたがる経験を持つ読者にとって、より深く共鳴する側面を有していると考えられる。筆者もまた、経歴上の共通点から、氏の作品に強い親近性を覚えた。本稿では、ケズナジャット氏の作品、とりわけ『開墾地』を読んで抱いた所感について述べることにする。

2. アメリカにおけるイラン系移民について

まず、『開墾地』の主人公ラッセルの父が、若き日にイランからアメリカへ移住した人物として描かれている点に触れておきたい。この設定を通じて本作は、アメリカにおけるイラン系コミュニティの存在や、移住者が故郷といかに関係を保ち続けているのか、さらには異国において自らの文化的アイデンティティをいかに維持しようとしているのかという、イラン系移民の姿を写し出している。

イランのディアスポラの中でも、最も大きなコミュニティがアメリカに形成されていることは広く認識されている。19世紀から20世紀前半にかけては、主な移住先・留学先はヨーロッパ、特にフランスであった³が、第二次世界大戦後、アメリカの国際的影響力が強まるにつれ、移住先や留学先の中心は次第にアメリカへと移行していった。1979年のイラン革命やイラン・イラク戦争、政治的抑圧、さらにその後本格化する経済制裁といった要因が重なり、イランからの国外移住は現在に至るまで続いている。

1979年のイラン・イスラム革命以降、宗教的保守勢力が権力を掌握し、文化・芸術活動に対する統制は急速に強化された。とりわけ女性が公の場で歌うことは厳しく制限され、服装や日常的な振る舞いに関しても細かな規範が課されるようになった。その結果、音楽や映画をはじめとする文化活動は著しく制約され、表現の自由は大きく後退した。

しかし皮肉なことに、こうした規制が強まれば強まるほど、人々のあいだでは革命以前に存在していた文化的自由への郷愁やノスタルジアがいつそう強まっていった。作品のなかでラッセルが折に触れて言及する父の聞く音楽や観る映画も、その多くが革命以前の作品に由来しており、そこには失われた自由な文化空間へのノスタルジアが色濃く反映されている。

² 本稿は、2025年11月28日に大阪大学人文学研究科主催のシンポジウム「グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む」において、筆者がパネリストとして行った講演内容をもとに、加筆・修正を施したものである。

³ Nasschi-Behnam (2000)

米国国勢調査局(United States Census Bureau)によると、アメリカに定住するイラン系人口は、2020年の国勢調査では約56万人あまりとされているが⁴、自己申告に基づく調査であるため過少計上の可能性が指摘されている。第一世代から第四世代までを含めれば、その規模は数百万人に達すると推定されている。ロサンジェルス、サンフランシスコ湾岸地域、ヒューストン、ニューヨーク、ワシントンD.C.周辺などに大規模なコミュニティが集中しているようだ。

イラン系アメリカ人は、アメリカ社会に同化しながらも、イランの新年⁵、ノールーズやヤルダー（イランの冬至）といった伝統行事を祝ったり、ペルシア語メディアを運営したりすることで、自らの文化を維持している。全体として教育水準は高く⁶、公的統計に基づく分析によれば、2019年時点において、アメリカに居住するイラン系移民の貧困率は12%であり、これはアメリカ生まれの人口と同程度であると報告されている。この数値は、全移民人口の平均的な貧困率（14%）よりもやや低いものの、イラン系移民コミュニティ内部にも経済的に脆弱な層が一定程度存在していることを示唆している⁷。宗教的にも、ムスリム、ユダヤ系、バハーイー教徒、ゾロアスター教徒、キリスト教徒、無宗教層など、多様な背景が共存している。

さらに、科学技術、医学、ビジネス、学術など多様な分野で専門家を輩出し、アメリカの政治や社会に対しても一定の影響力を有している。世代交代が進むにつれて、アイデンティティや文化継承のあり方は変化しており、言語保持、宗教的多様性、社会経済格差、新たな移民層の特徴など、今後も検討すべき課題は広がり続けている。イラン系アメリカ人は、多文化社会であるアメリカの中で独自の存在感を保ちつつ、その内部に複雑で豊かな多様性を抱えるコミュニティである。

3. 言語学の観点から読むケズナジャット氏の作品

筆者の専門は言語学である。ケズナジャット氏の作品を言語学の観点から読み解くことは、筆者にとってきわめて興味深い営みである。文学の世界と同様に、言語学の世界においても、言葉は中心的なテーマである。ただし、文学が言葉を主として表現の手段として扱うのに対し、言語学はその言葉自体を研究対象とする。言葉は人間の思考や感情、文化を映し出す伝達手段であると同時に、人と人とを結びつけるロープのような存在でもある。

私たちは日々、さまざまなメッセージを伝えるために言葉を用いているが、言葉を発することには少なからぬ負担が伴う。負担は話し手だけのものではなく、聞き手にとっても、言葉を受け取るあいだその場に拘束されるという意味で、一定の負荷が生じる。そのため、日常生活において言葉は必要最小限に、いわば経済的に用いられる傾向がある。これは「言語における経済性」と呼ばれる現象であり、日常会話では限られた時間の中で要点のみが拾い上げられ、詳細はしばしば時間の無駄として省略される。

しかし、小説や映画の世界においては、こうした制約から相対的に自由になり、日常で

⁴ https://www.census.gov/newsroom/press-releases/2023/2020-census-detailed-dhc-file-a.html?utm_source=chatgpt.com（閲覧 2025 年 11 月 20 日）

⁵ ノールーズとは、春分の日に行われるイラン起源の新年祭であり、「新しい日」を意味する。イランをはじめ、中央アジア、コーカサス、西アジアなど広範な地域で祝われ、家族や親族が集い、新年の訪れを寿やかに迎える習慣を持つ。ディアスポラにおいても、文化的アイデンティティを確認・継承する重要な行事として位置づけられている。

⁶ Walker-Jones (2017)

⁷ 米国の移民政策研究所 Migration Policy Institute (MPI)の報告書。

(https://www.migrationpolicy.org/article/iranian-immigrants-united-states-2021?utm_source=chatgpt.com)（閲覧日 2026 年 1 月 14 日）

は見過ごされたり忘れ去られたり、あるいは十分に消化されないまま残された感情を、腰を据えて描くことが可能となる。それでもなお、空間や時間、さらには人間の喜怒哀楽を含む多次元的な世界を、実際に発せられた言葉そのものだけでなく、その背後に潜む意味や感情をも掬い取る必要がある。これらの多層的な要素を一次元の言葉へと変換することには、きわめて大きなエネルギーが要される。ケズナジャット氏の作品からは、そうした蓄積されたエネルギーが、強い密度をもって伝わってくるのである。

以上の観点から、ケズナジャット氏の作品は、言語の経済性が支配的な日常的言語使用とは異なる次元において、言葉の持つ潜在的な力を最大限に引き出しているといえる。言語学的視点から見ても、そこには、言葉がいかにして人間の内面や関係性を深く掘り下げるのかを示す、示唆に富んだ表現が凝縮されている。

『開墾地』の冒頭では、主人公ラッセルが、帰省の折に耳にしたセミの鳴き声を前にして、その呼称を日本語で捉えるべきか、あるいは英語で捉えるべきかという葛藤を脳裏に抱く様子が描かれている。これは、第二言語学習者であれば一度は経験するであろう、知覚と言語のあいだの揺らぎを象徴的に示す場面である。ラッセルは、土地に満ちるセミの声をきっかけに、自身の内に併存する二つの言語体系のあいだで逡巡する。その一瞬のためらいのなかに、複数の言語と文化を生きる主体としてのラッセルの在り方が凝縮されている。筆者はこの場面に、ケズナジャット氏の作品が内包する創造的エネルギーの一端が、すでに顕在化していると感じた。

4. 『開墾地』という題と比喩構造

「開墾地」という題が与えられた理由は、物語を読み進めるにつれて次第に鮮明になっていく。読了後もなお、この語は強い余韻をもって読者の意識に残り続ける。少なくとも筆者にはそう感じられた。ラッセルが日本語の学習を続ける姿、父が葛と格闘しながら土地を守り続ける姿、そして家族のために家を守り抜こうとするひたむきな努力、これらすべてが、「開墾地」という比喩の中に集約されているのである。

では、葛とは何を象徴しているのだろうか。筆者の理解では、生い茂って、あらゆるものを覆い尽くす葛は、「時間の力」の象徴として読むことができる。時間はつねに、私たちの感情や人間関係、そして過去の記憶の上に、忘却という塵を静かに降り積もらせていく存在である。イランの親族との関係を維持しつつ、アメリカ社会の中でコミュニティを築き、ロサンジェルスで「テヘランジェレス」と呼ぶイラン系アメリカ人たちもまた、現地社会に同化しながら、過去とのつながりを完全には失わぬよう懸命に抗っている。その姿は、この小説の随所から鮮やかに読み取ることができる。

主人公ラッセル自身もまた、英語という一つの言語世界にとどまることなく、日本語を学び、日本へ留学し、単一言語という檻から抜け出そうとする人物として描かれている。その姿こそが、まさに新たな「開墾地」を切り拓く行為にほかならない。言葉は私たちに外界との相互作用を可能にする一方で、その言語にしか通用しない世界へと私たちを閉じ込める檻ともなりうる。この点は、筆者自身が言語学の授業において学生たちに繰り返し伝えている主題とも重なっている。

人間は、地上の生物の中でもっとも強力な武器、すなわち言語を獲得し、世界を描写し、記録し、教育し、伝承し、さらには支配してきた。しかし、旧約聖書に描かれる「バベルの塔」の神話が示すように、人間は同時に、言語の分断によって互いの言葉を失い、異なる言語という檻に閉じ込められた存在でもある。人間の多くは単一の言語を主要な思考と言語活動の基盤とする単一言語話者として生きており、その言語が通用する国家、社会、あるいは特定のコミュニティの内部でのみ円滑な意思疎通が可能である場合が少なくない。

近年、同時通訳や機械翻訳の技術は著しく進展しているが、それらはいずれも言語の隔たりを完全に解消するものではなく、意味や感情、文化的含意のすべてを等価に移し替えることは困難である。そうした制約を最終的に乗り越える手段は、やはり他の言語を学び、その背後にある文化や価値体系を身体化していくほかにはないのではないだろうか。

ラッセルは幼少期、父と親戚たちの会話を脇で聞きながら、自らが英語という檻の中に置かれていることを早くから自覚するようになる。

話の論理は掴めなかったものの、行間から切実な感情が確かに聞き取れて、それが自分の中にある何かと共振していた。むしろ母親の言葉が不条理になればなるほど、その共振がさらに力強くなり、ラッセルはその感覚を恐れていた。しかしその恐怖から逃げていける場所がなかった。自分の中にある母語から逃げようがない。母親がいなくなってからも、その不条理が消えることはなく、学校の校舎でも、店や公園でも、英語で話し合う町の人たちから母親と同じような言葉が聞こえてきて、同じような不安を抱いた。そのためだろうか、いつでも英語の外へ出て、ペルシャ語へ自由に移動できる父親のことを羨ましく思うことがあった。

(ケズナジャット『開墾地』: 72p)

彼は父にペルシア語を教えてほしいと願い出るが、その願いは拒まれてしまう。父はすでに自身の檻を脱した存在であり、「母語はむしろ檻のように感じられた」(ケズナジャット『開墾地』: 77p) ラッセルの切実な思いを、もはや理解できなくなっているのである。

さらに言えば、ケズナジャット氏自身が日本語という非母語で小説を書いているという事実もまた、一つの言語の檻にとどまり続けることを回避しようとする意志の表れとして読むことができると解釈できる。

5. 『開墾地』におけるオリエンタリズム

物語の中では、イラン的な要素が断片的に提示され、読み進めるにつれて、その情報量と意味の厚みが徐々に増していく。ラッセルの父は、イランという祖国に対して強い誇りを抱いている一方で、革命後の政治的・社会的変化によって、もはや帰国して生活することが不可能であるという矛盾を抱えている人物として描かれている。多くのイラン人が共有してきたように、革命は誤った方向へ進んだのではないかという疑念が、彼の内面には静かに横たわっているのである。それは言葉として明示されることはないが、行動や態度の端々から読み取ることができる。イランは長い歴史と豊かな文化を持つ国であるにもかかわらず、父は一時帰国を終えてアメリカに戻ると、絶望的とも取れる言葉を口にする。その一方で、イランの食事の方がはるかに美味しいと繰り返し誇らしげに語り、自らの成功体験を大げさに語る姿からは、イラン社会に根付く誇りをもって語る文化がよく表れている。

さらに、父と従兄弟のアミン（ペサルハーレ）が過去を懐かしむように語り合う場面からは、イラン人特有とも言える強い郷愁の感情がにじみ出ている。『開墾地』では、日本やイランを指して「向こう」と呼ぶ表現が用いられており、その語感には単なる地理的距離だけでなく、どこにも完全には帰属できないという疎外感や宙づりの感覚が重ね合わされているようにと読み取ることができる。こうした表現の背後には、国境や使用する言語によって人が振り分けられ、特定の「檻」に閉じ込められてしまうことへのラッセル自身の違和感と抵抗の意識が、行間から浮かび上がってくる。

以上見てきたように、ケズナジャット氏の作品は、移民としての経験、言語の選択、文

化的記憶といった要素を重層的に織り込みながら、個人史を超えた普遍的な問いを提示している。本稿での考察は、その一端を言語学および文化的観点から検討する試みであった。

6. おわりに

本稿では、グレゴリー・ケズナジャットの小説『開墾地』を手がかりに、移民経験と言語選択、さらには言語と主体の関係について、言語学および文化的観点から考察を試みてきた。なかでも、イラン系移民としての歴史的背景や、革命後の社会的制約がもたらしたディアスポラの文脈を踏まえつつ、作品に描かれる言語的葛藤や文化的記憶の意味を検討した。分析を通して明らかになったのは、『開墾地』が単なる移民文学や越境文学にとどまらず、言語が人間にもたらす可能性と制約の両面を鋭く照らし出す作品であるという点である。単一言語が思考や世界認識を支える一方で、それが同時に「檻」として機能すること、そしてその檻から抜け出そうとする試みが、言語学習や創作行為として表象されている点が印象的である。主人公ラッセルが日本語と英語のあいだで揺れる姿は、複数の言語と文化を生きる主体に特有の不安定さを示すと同時に、新たな視点を切り拓く契機ともなっている。その姿は、固定されたアイデンティティではなく、絶えず変化し続ける自分のあり方を示唆しているように思われる。ケズナジャット自身が非母語である日本語で小説を書くという実践も、一つの言語に回収されることを拒む姿勢の表れとして位置づけられるだろう。

本稿で論じた「開墾地」という比喻は、土地だけでなく、言語や記憶、文化の領域でも新しい可能性を切り拓こうとする人間の営みを象徴している。言語は、人間に世界を与えると同時に、世界を分断する力も持つ。『開墾地』はその両義性を引き受けながら、言語の境界に立つ者の視点から、私たちにあらためて「言葉とともに生きるとは何か」「アイデンティティとは何か」を問いかけているように感じられる。

参考文献

ケズナジャット, グレゴリー (2022) 『開墾地』 講談社。

Migration Policy Institute (2021). Iranian Immigrants in the United States. <https://www.migrationpolicy.org/article/iranian-immigrants-united-states-2021> (閲覧日: 2026年1月14日)

Nassehi-Behnam, Vida. "FRANCE xvii. Persian Community in France." *Encyclopaedia Iranica*. Published December 15, 2000. <https://www.iranicaonline.org/articles/france-xviii/> (閲覧日: 2026年1月14日)

Walker-Jones, Delia (2017). *Conference of the Birds: Iranian-Americans, Ethnic Business, and Identity*. Geography Honors Projects, Macalester College.

米国国勢調査局 (United States Census Bureau). 2020 Census Detailed Demographic and Housing Characteristics File A. <https://www.census.gov/newsroom/press-releases/2023/2020-census-detailed-dhc-file-a.html> (閲覧日: 2026年1月14日)